

第四章 当世具足の仕組み



当世具足は、頭を守る兜や、胸部や腹部に胴、肩や上腕に袖、顔面に面頬、腕から手甲に籠手、臍に臍当、大腿部と膝に佩楯で構成されています。それらは基本的に小札や威毛、金具廻、絵草、金物の5つの部材で作られます。

小札は長さ5～7cm程度の鉄や革製の小さな板で、最も多く使われます。威毛は小札を綴じ付けるための紐、金具廻

は鎧の形を保つための鉄や革製の板、絵草は金具廻などに貼る文様を染めた草、金物は金属製の装飾物や鉾のことで。小札、威毛、金具廻が甲冑の形を作り、絵草、金物が実用性や装飾性を高めています。

また、これら当世具足は、甲冑師たちの工房で、複数の職人たちの手によって作り上げられていきました。



「旧府内藩士家伝来具足 鎖帷子」 大分市歴史資料館 所蔵



「旧府内藩士家伝来具足 胴(前部)」 大分市歴史資料館 所蔵



「旧府内藩士家伝来具足 袖」 大分市歴史資料館 所蔵



「旧府内藩士家伝来具足 籠手」 大分市歴史資料館 所蔵



「旧府内藩士家伝来具足 面頬」 大分市歴史資料館 所蔵



「職人絵 模本」 大分市歴史資料館 所蔵

エピローグ

幕末から明治時代の初めには、西洋から新しい文化や思想が伝わります。明治維新に伴う戊辰戦争などの実戦では、戦いの主要な武器が新式の銃や大砲に代わりました。時代の要求に応じ変化してきた鎧や兜も、新しい時代には適応できず、その役割を終え戦場から消えていきました。



「錦絵 薩肥戦略記(部分) 個人蔵

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol.
130
2023.3.4

鎧兜の

歴史と造形



「稲葉家童具足(兜)」
大分県立歴史博物館 所蔵



「稲葉家童具足」
(胴・籠手・袖・佩楯・臍当)
大分県立歴史博物館 所蔵



「紺糸威五枚胴具足」 松栄神社(大分市)所蔵

発行 大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL:097-549-0880 FAX:097-549-5766

【開館時間】入館は16:30まで 【休館日】※ただし祝日の場合は開館 9:00-17:00 【月曜日(第1月曜を除く)、第1火曜日 祝日の翌日】※ただし土日の場合は開館 【年末年始の休館日】 12/28-1/4 【観覧料】※団体は20名以上 大人210円(団体150円) 高校生100円(団体50円) 中学生以下無料
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者1名は無料。◎入館時に受付で手帳を提示してください。
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予定を変更する場合がございます。 発行日：令和5年3月4日

会期

令和5年3月4日[土]▶5月7日[日]

大分市
歴史資料館

鎧兜の歴史と造形

弥生時代、稲作が広まると争いが起きようになり、武器とともに身を守る防具も使われはじめました。弥生時代には、木製のよろい（甲、鎧）が作られており、古墳時代になると、かぶと（冑、兜）と組み合わせた防具として、鉄製のよろいかぶと（甲冑）が作られはじめます。

その後よろいかぶとは、平安時代の^{おおよそ}大鎧、^{どうまる}中世の^{はらまき}胴丸・腹巻、^{どうせい}戦国時代末期の^{ごそく}当世具足へと、様々な素材や加工技術の進化とともに、大きな変化を遂げていきます。それらは、戦闘方法や武器の変化に合わせた実用的な防具として進化し、また当時の流行を反映して変化しました。

しかし、江戸時代になって戦がなくなると、鎧や兜は実用性を失い、武家の誇りや出自を示す意匠を凝らした装飾的な形態へと変わっていきました。

今回の展示では、当館所蔵の鎧と兜を中心に、その歴史や構造と装飾について紹介します。

第一章 甲冑の成立



古墳時代には、鉄製の甲冑が出現し、古墳に副葬されるようになりました。体の胴体を守る短甲は、鉄の板を革紐で綴じ合わせる技法で作られ、後には鉄板をリベット状の^{びょう}鉾を用いてつなぎ合わせて作られました。また、鉄や革でできた小札と呼ばれる小さな板を綴り合わせて体全体を覆う、^{けいこう}挂甲という甲も作られるようになりました。

頭を守る冑は、鉄の板をつなぎ合わせて形をつくり、正面を鋭く尖らせた^{しょうかくつきかぶと}衝角付冑や、^{ひさし}野球帽のつばのような庇を付けた^{まびきしつきかぶと}眉庇付冑が作られました。

これらは、大陸からの影響を受けつつも、日本独自に発展していったと考えられます。

◀「岬古墳出土遺物 短甲」
大分県指定有形文化財
豊後高田市岬古墳出土
大分県立歴史博物館 所蔵

▶「金銅製眉庇付冑」
千葉県木更津市
祇園大塚山古墳出土
東京国立博物館 所蔵



第二章 中世の鎧と兜



平安時代末期になると、騎射戦に有利な大鎧という重厚な鎧が登場し、鎌倉時代まで使われました。室町時代に入り、太刀や^{なきなた}薙刀など^{うちもの}打物による徒歩戦が主流になると、身軽に動くことのできる^{どうまる}胴丸や^{はらまき}腹巻が用いられるようになり、鎧は戦闘方法の変化に伴い、様々な形態に大きく進化していきました。

一方、兜は首や顔の側面を保護する^{しころ}鞆や吹返が発達し、複数の鉄板を糸でつなぎ合わせて作られました。また、鉄板の接合に突起のある鉄鉾が使われた^{いかはしかぶと}厳星兜から、多くの^{はざいた}矧板をつなぎ合わせて作られた^{すじかぶと}筋兜へと変化していきます。

さらに、南蛮文化の影響を受け、西洋の形を取り入れた桃形の南蛮兜も作られました。



「大化帖」(筋兜の図) 大分市歴史資料館 所蔵



「児島高徳騎馬図」 大分市歴史資料館 所蔵



「鉄地筋金象嵌桃形兜」 大分市歴史資料館 所蔵

第三章 当世具足の登場



室町時代末期から安土桃山時代になると、簡素で堅牢な^{けんろう}当世具足と呼ばれる新しい形式の鎧と兜が現れました。

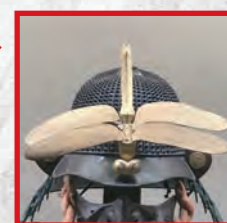
江戸時代になると、当世具足は戦における実用的な防具から家格を象徴した威厳や装飾を重視するものになり

ました。そのため、当時の^{きんこう}金工や^{しつこう}漆工、^{せんしよくひかく}染織皮革など、工芸技術の粋を集めた鎧と兜が作られ、美術工芸品としても優美なものになりました。



兜の吹返に府内藩大給松平家の釘抜紋が描かれ、府内藩に伝わる格式高い甲冑であることが分かります

「青糸威二枚胴具足」
松栄神社(大分市) 所蔵



兜の前立には、前にしか進まないことから武士にとって縁起の良い^{かまむし}「勝虫」と考えられていたトンボが付けられています。

「岡本家青糸威二枚胴具足」
大分市歴史資料館 所蔵

